令和8年度 獨協医科大学大学院看護学研究科博士前期課程入学試験（第1次募集）
【小論文】 出題意図・解答例／採点基準

問題１

【出題意図】

看護職は、個人の健康を支援するのみならず、人々が自分らしく生きることのできる社会環境を整える役割を担う専門職である。本小論文問題は、経済成長と人々の幸福の関係を題材とし、物質的な豊かさのみでは測定が難しい「生活の質（QOL）」や「主観的幸福感」に焦点をあてた。具体的には、経済や社会構造の変化を背景として、人々の「豊かさ」や「幸福」をどのように捉え、看護実践や研究に反映できるかを多面的に考察できる力を確認することを意図とする。

本小論文は、以下のアドミッションポリシーとの関連を意図とした。

1. 保健医療福祉専門職者としての知識並びに職業倫理を有する人
   人間の尊厳や幸福を重視する倫理的視点をもって社会問題を考察できるかを問う。

2. 保健医療福祉の専門分野における国外の動向及び実践上に課題意識を有し、解決に取り組む意欲を有する人
   OECD や国連など国際的な幸福指標を踏まえ、グローバルな視点から日本の現状を理解し、看護の課題を見いだすことができるかを問う。

3. 保健医療福祉専門職者として自己研鑽し続ける意欲を有する人
   豊かさという抽象的な概念を自身の専門領域に近づけ、今後の学びや研究への動機づけとして言語化できるか問う。

【採点基準】

1. 経済成長と幸福には乖離があることを捉え、自分の立場で整理している。
2. 豊かさや幸福を看護の実践や研究に関連付け論じている。
3. 自身の看護経験・関心を踏まえ、独自の考察や発展的視点が述べられる。

問題２

【出題意図】

大学院博士前期課程入学までに必要な下記のレジネスを確認するための設問である。

・（ナイチンゲールがいう「看護」を理解し、）これまでの臨床経験から看護の専門性に対する自分なりの考えを有している
・本当の看護の例示から、その対極にある本当の看護でないことを考察できる
・臨床での経験（現象）を他者へ伝わる表現で言語化できる
・抽象と具体を連結し、思考したことを論理的な記述できる
・誤字脱字なく、文章を記載できる

【解答例】

私はこれまでの看護実践の中で、「本当の看護が行えなかった」と感じた場面がある。それは、術後の疼痛と不安を抱えた高齢患者への対応である。患者は腹部手術後で、夜間に痛みを訴えた。しかし、私は定時の鎮痛薬を患者に与えて、2 時間毎の体位変換を行うのみであった。翌朝、患者は「痛みでほとんど眠れなかった」と語った。

ナイチンゲールは『看護覚え書』の中で、看護とは患者の生命力を消耗させないよう環境を整えることであると述べている。この視点から振り返ると、患者が安楽にいられる療養環境を十分に整えることができていない自分に気づいた。患者の表情や身体の動きを観察する姿勢にも欠けていた。夜勤で多忙だった私は看護業務をこなすことに意識が向き、患者の生命力を支えるという本質的な目的を見失っていたといえる。

本当の看護とするために必要だったのは、業務をこなすのではなく、生命力の回復を支援する重要な情報として患者の訴えに耳を傾ける姿勢をもつことである。そして疼痛の評価を行い、痛みが少しでも軽減されるような療養環境の調整を行い、頓服の鎮痛薬を使用するなどして、患者の身体的・精神的安寧を保つような関わりが必要である。看護師の観察力と判断力、そして人間理解が伴ってこそ、看護は「本当の看護」になると考える。

この経験から、私はどのような状況でも「患者の生命力を支える」ことを看護の中心に据える必要性を学んだ。今後は、目の前の業務に追われる中でも、患者の状態を丁寧に観察し、環境を整え、安寧を保つことを常に意識して実践していきたい。